

子育て生活における母親の幸福感の母子の年齢による違い

○堂坂更夜香¹・向後千春²

(¹早稲田大学人間科学部・²早稲田大学人間科学学術院)

【問題と目的】

現代社会は、誰もがストレスを抱えて生きている。近年では、母親の育児ストレスによる幼児虐待事件が急増し社会問題になっている。ストレスが原因でうつ病など心の病に罹るケースも少なくない。従来の心理学では、このような病理モデルをもとに治療的観点からの研究が多く行われてきた。その結果、患者の症状を和らげる対処法は多く提案されてきた。しかし、健康的な人間がストレスを抱えながらも生きがいや幸福感を感じる方法などを中心とした予防的観点からの研究は、まだ一部にとどまっている。

母親もまた、子育てにおいて日々ストレスを抱えている。子育てにおける母親の不安やストレスを軽減し、幸福感を継続的に高めるにはどのような方法があるのだろうか。子育てにともなう様々なポジティブ感情や幸福感を高めることは、母親が子育てを通して自己の存在価値を高め、親として女性として、よりよく生きるために不可欠の課題である。そこで、母親が子育てに関してどのような感情を持っているのかを明らかにすることが必要である。

本研究では、母親が抱く肯定的な情動を母親の幸福感として「母親の幸福感尺度」を作成し、これによって測られる母親の持つポジティブ感情やネガティブ感情が、母子の年齢によって差異がみられるかを明らかにすることを目的とした。

【方法と結果】

子育て中の母親を対象に、特に子どもの年齢を問わず、子育てにおける母親の幸福感に関する質問紙調査を行った。質問は全25問で、内訳は、母親と子どもの属性に関する項目5問、母親の幸福感尺度に関する項目20問であった。2012年6月28日から7月10日までの計13日間、REASによるオンライン調査にて実施した。

調査協力を得られた母親は126名であった。母親の年齢は、27歳から60歳までで、平均年齢は40.61歳 ($SD=6.12$) であった。子どもの数は1—5名で、平均1.84人 ($SD=0.78$) であった。

母親の幸福感に関する20項目のうち、正規性の確認、G-P分析、I-T相関分析を行った結果、16項目が残った。つぎに、この16項目で因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。プロマックス回転後の因子負荷量が.35未満のものを除外した結果、3因子13項目が得られた ($\alpha=.82$)。第1因子は「子育てに関する無力感」 ($\alpha=.84$)、第2因子は「子育てによる恩恵」 ($\alpha=.78$)、第3因子は「子育てへのソーシャルサポート」 ($\alpha=.56$) と命名した。

下位尺度得点について母親の年代別による t 検定を行った結果、「子育てに関する無力感」のみ、30代以下の母親は、40代以上の母親よりも高い傾向があった ($t(124)=1.89, p<.10$)。さらに、「母親年齢×末子年齢」による2要因分散分析を行った結果、「子育てに関する無力感」と「子育てによる恩恵」において交互作用がみられたため、単純主効果の検定を行った。その結果、30代以下の母親は、末子が未就学児よりも小学生である方が、無力感が高かった ($F(2, 120)=9.70, p<.01$)。また、末子が未就学児をもつ母親では、30代以下の母親は40代以上の母親より子育てから恩恵を強く感じていた ($F(1, 120)=4.32, p<.05$)。また、末子が小学生である母親では、40代以上の母親が30代以下の母親より子育ての恩恵を強く感じていた ($F(1, 120)=5.67, p<.05$)。

【考察】

因子分析の結果、母親の幸福感は、三つの下位尺度で構成されており、母親の年齢や末子の年齢により差異がみられた。未就学児を持つ母親の方が無力感が低く、また子育てから恩恵を強く感じているということから、子育てを通して母親としての役割を果たしていると感じる時に幸福感が高まることが推察された。母親は、子育ての大変さにネガティブ感情を抱きストレスを抱えながらも、子どもに必要とされたり、頼られたりすることで母親としての喜びを感じポジティブ感情を抱くのだろう。また、小学生はギャングエイジとなり未就学児より扱いにくくなるので、無力感が高まるのだろう。これらのことから、母親の幸福感は、子どもの年齢、母親の年齢により変化することが示唆された。